

ニンニク栽培 評判に

光と愛の事業団 清須の作業所助成

福祉作業所で働く人たちの自立を支援する「生き生きチャレンジ助成事業」(読売光と愛の事業団主催)の支援先として、県内から清須市春日屋敷の就労継続支援作業所「セブンデイズファーム」が決まり、支援金100万円が贈られた。同作業所の活動を紹介する。



「セブンデイズファーム」で働く人たち

同作業所は昨年4月、心身に障害のある18歳以上の男女20人でニンニク栽培を始めた。少しずつだが、「おいしい」と評判になっていいる。運営を安定させようと、売れ残りで「ニンニクのつくだ煮」加工を考え、プレハブ小屋を改修して水回り設備や給排水設備を整えることにした。しかし、売り上げではとても資金を賄えず、同助成事業に申請したところ、半分弱の100万円を受けられることになった。作業所設立者の後藤学さん(45)は「これを励みにもっと販路を拡大したい」と意気込む。

後藤さんは13年前から不動産管理会社を経営。福祉事業に乗り出したのは、テナントが入らないビル所有者に、グループホームへの改装を提案したことがきっかけだった。就労支援の必要な人たちにとって働く場所がないことを知る中で、「実家が営んでいる農業と組み合わせれば、障害者にもプラスになるのでは」と、昨年4月に設立した。

収穫したニンニクは、芽をちょんまげ、根っこをヒゲに見立て、織田信長にあやかり、「信長に

んにく」と銘打って、1個30円で売り出した。それが評判となり、朝市などに

も出店して、販売するようになった。それでも半分以上は売れ残る。つくだ煮ならば保存がきくし、収入の安定につながる。と期待し、つくだ煮作りにも乗り出した。それまでの就労者の収入は月9000円から1万円。その倍までいなくても、少して

も多くの収入がみんなに行き渡るようにと作業に取り組んでいる。後藤さんは「周りの助けがあつて壁を乗り越えてきた。就労者にとっては、外に出て体を動かすことで健康を取り戻すというメリットもある。この輪を広げていきたい」と話している。

英語の記
国際関係
名城大で言
読売
14日、
開かれ
の高須賀茂文・
次長が「英語で